

2007 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：138 カ国

応募総数：4,029 作品（子どもの部 1,315 作品、若者の部 2,714 作品）

文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『多様性から調和を——平和な世界づくりにメディアが果たす役割』
スナー・シャー（米国）8 歳

<若者の部>

- 『国境を越えて平和を発信する』
アナ・ロサリオ・A・エリカーニョ
（フィリピン）24 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『マスメディアは私たちを映す鏡』
アレクサンドラ・ジレル（ベラルーシ）10 歳
- 『携帯電話のメッセージ——「平和にいいよ、みんな！:p」』
ユニサ・ラトナディラ・T・A・K
（インドネシア）14 歳

<若者の部>

- 『平和を発信』
根本 ゆかり（日本<米国在住>）16 歳
- 『互いの話を聞き、自分の内なる声を聞く——持続的な平和の場を創出する「ラジオ・フォーラム」の必要性』
サラ・J・ウォルコット（米国）25 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 尾沢 百音（日本<米国在住>）9 歳
- ウェンディル・エルマック・メヒア
（フィリピン）12 歳
- 坂本 百合香（大阪府）13 歳
- 副島和樹（日本<マレーシア在住>）13 歳
- エルマド・オチエン（ケニア）14 歳

<若者の部>

- マルガリータ・ミシノワ（ブルガリア）17 歳
- ヨアンナ・ピエトウシャック（ポーランド）17 歳
- 佐藤 拓人（日本<米国在住>）18 歳
- ヴェールレ・ヴリンツ（ベルギー）20 歳
- タラ・イヴォンヌ・フィン格拉斯
（アイルランド）23 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- ラウル・アンドレス・ビジャヌエバ・アンブリス
（メキシコ）8 歳
- 江橋 麻由（日本<カナダ在住>）9 歳
- クリスティアーナ・ルイーザ・T
（インドネシア）9 歳
- デニス・アンネ・カストロ（フィリピン）11 歳

<若者の部>

- シャロン・ロウガート（米国）15 歳
- ラファエラ・ストック（オーストラリア）15 歳
- グレンドン・コー・ジュンウェイ
（シンガポール）15 歳
- エミリー・アドゥラム（ニュージーランド）16 歳
- ユーンジ・キム（韓国）16 歳

- ピラル・ビジュアルマルソ・グリソーニ
(ウルグアイ) 11 歳
- グレブ・ドゥボフスキー (ベラルーシ) 11 歳
- アノブ・アシフ (インド) 12 歳
- 今井 朱里 (奈良県) 12 歳
- 市原 良香 (日本<米国在住>) 12 歳
- 竹馬 一輝 (日本<米国在住>) 12 歳
- 中山 晴貴 (北海道) 12 歳
- シャーニ・ベラット (イスラエル) 12 歳
- 阿部 雄大 (東京都) 13 歳
- ビスタ・イセト
(日本&ネパール<ネパール在住>) 13 歳
- 越智 啓太 (日本<米国在住>) 13 歳
- 加藤 美帆 (日本<中国在住>) 13 歳
- 荒木 由美 (日本<カナダ在住>) 14 歳
- アレキサンダー・グレース
(オーストラリア) 14 歳
- 岡田 萌 (東京都) 14 歳
- 太田みのり (東京都) 14 歳
- 杉野 健祐 (日本<米国在住>) 14 歳
- タチアナ・プジルチェンコ (ウクライナ) 14 歳
- バネッサ・イバノバ・バサローバ
(ブルガリア) 14 歳
- 山城 あやね (日本<フィリピン在住>) 14 歳
- 余川 友梨 (東京都) 14 歳
- 久保田 萌美 (宮崎県) 16 歳
- アレシア・クズミナバ (ベラルーシ) 16 歳
- 佐藤 周平 (日本<米国在住>) 16 歳
- カタリーナ・ドイチュマン (ドイツ) 17 歳
- 清水 太一 (青森県) 17 歳
- シン・フワヨン (韓国) 17 歳
- ソウミトラ・スピナーヤ (インド) 17 歳
- ケイトリン・ジャック (米国) 18 歳
- チ・ニン・ゴック・ラン
(ベトナム<カナダ在住>) 18 歳
- 渡邊 絵里 (北海道) 18 歳
- エルナラ・メーディエバ
(アゼルバイジャン) 19 歳
- 横峯 誠悟 (兵庫県) 19 歳
- ジブコ・トモフ・ダラクチエフ
(ブルガリア) 20 歳
- ロディミロ・ロドリゴ・フロレス
(メキシコ) 20 歳
- ノニエルム・サンドラ・ウメアシエグブ
(ナイジェリア) 20 歳
- ニコル・アペル (米国) 21 歳
- ミカエル・バーコーテレン (ベルギー) 22 歳
- マイケル・コリンズ (米国<沖縄県在住>) 23 歳
- フェルナンド・ユヌエン・フランシスコ・テレス・フロレス (メキシコ) 23 歳
- アナ・マリア・マヨール・ヒメネス
(コロンビア) 23 歳

学校特別賞 (1 校)

- バトルクリーク補習授業校 (米国・ミシガン州)

多様性から調和を——平和な世界づくりにメディアが果たす役割

（原文は英語）

スネー・シャー（8 歳）

米国・ニューヨーク州

マックベイ小学校

私は、しばらく前まで、メディアの役割についてあまり知りませんでしたが、1 年間インドで過ごしてから、それが変わりました。それまでは、ニューヨークに住んでいました。インドでは、初めて物乞いの人を見ました。宗教がどのように人々の仲を割いてしまうのかも目の当たりにしました。インドにいた時に、コミュニケーションとメディアという言葉を知りました。また、インドでは、私が何者なのか、みんなから聞かれました。大切なことは、私が人間で、女の子だということなのに、私がヒンドゥー教徒なのか、イスラム教徒なのか、キリスト教徒なのか、ユダヤ教徒なのか、それともそれ以外の宗教の信者なのかということを、みんな知りたがりました。



インドは、世界で一番大きな民主主義の国です。私が住んでいたのはグジャラート地方で、しばらく前に大勢の人たちが殺されたところでした。地元の人たちは、その人たちが好きではなかったのです。それは、ある宗教に従っていなかったからでした。私は旅行が大好きですし、世界中に家族がいます。ヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、カリブ海、それ以外にもたくさんの土地に行ったことがあります。

世界のいろいろな国や地域に行きましたが、どこへ行っても、言葉が違い、人々の肌の色が違い、食べ方やお祈りの仕方が違いました。でも、どこの人々も、目は 2 つ、鼻は 1 つ、耳は 2 つ——みんな同じでした。考え方と行動の仕方が違っているだけです。それに、どの人々の家にも、新聞とテレビとラジオがありました。なかにはインドの田舎など、インターネットがまだない場所もありました。

至るところに、多様性が存在しています。メディアは、多様性から調和を引き出し、平和な世界を築く手助けができます。

例えば、イスラム教徒とキリスト教徒が仲良くし、イスラム教のイードの祭りとクリスマスと一緒に祝いしている話を伝えることができます。テレビアニメやアニメ映画では、いろいろな国や文化がどんなふう to 違うのかを、お話として教えれば、正しい理解を深めることができますと思います。ニューヨークを出るまでは、さまざまな文化やお祭りがあることを、私はちっとも知りませんでした。メディアは、他の文化、国々、民族に対してもっと広い心を持てるように、私たちを変えることがで

きます。公共の場でお祈りをしたり、ムハラムの行進で裸の剣を持って踊ったりすることが、イスラム教徒にとっては、ごくふつうのことだと知っていれば、それを初めて見た時にショックを受けなくてすむのです。

イスラム教徒は、キリスト教徒の考え方は急進的すぎるとしていますし、宗教についてとても厳しい立場をとっています。けれども、キリスト教徒とイスラム教徒が親友になれること、そしてお互いの共通点が多いことを教えてあげれば、寛容の心が養われるでしょう。寛容の心が養われれば、自然と平和になります。

私は、戦争がなくなれば、世界が平和になると信じています。でも、寛容の心を持たない限り、戦争はなくなりません。イスラム教徒が頭を覆うのは、歴史があつてのこと、侵略されたことがあつてのことだということ。彼らがローブを着ているのは、聖戦士であるからではなく、中東地域がとても暑いからだということを、私たちは理解しなければなりません。

ヒンドゥー教徒が牛肉を食べないのは、牛を神聖な動物として崇拝しているからです。彼らを笑ってはいけません。なぜなら、牛を崇拝するようになったのには歴史的な背景と根拠があるからです。イスラム教徒は豚肉を食べません。キリスト教徒は七面鳥を食べます。

メディアが、違う民族の間に存在する友情、思いやり、愛、信頼を描いた話を伝えてくれれば、世界は平和になるでしょう。

最近、私たち家族は、イスラム教のある聖人の話を読みました。サイババは有名な聖人で、彼の寺院には毎日5万人が訪れています。サイババは、イスラム教徒でしたが、今では彼の信者のほとんどがヒンドゥー教徒とキリスト教徒です。それは、サイババが宗教にとらわれず、人を肌の色で判断してはいけない、人柄で判断しなさいと言ったマーティン・ルーサー・キングのような人だったからです。サイババのような聖人は、イラクやボスニア、ロシアなど、どこにでも絶対にいると思います。メディアは、そういうことを私たちに伝えることができるのです。

属しているコミュニティや肌の色は、どうでもいいことです。私が白人ではないからといって、また私の親友が黒人で、私が褐色人種だからといって、特別扱いされる必要があるでしょうか。メディアは、肌の色が白だろうと黒だろうと褐色だろうと、その肌の下に流れているのは、誰でも同じ赤い血なのだというのを、世界の人々が理解する助けになる話をもっと伝えるべきです。肌の色が黄色、白、黒、褐色のどれかなんて、問題ではありません。私たちはみんな同じなのです。

みんなが私を地球市民と呼びます。私は、そのことを誇りに思っています。メキシコ料理も中国料理も大好きだからです。家族で過ごす最高の休暇は、ヨーロッパでの休暇です。私の家族はインド系で、私はいまアメリカに住んでいます。

メディアは、グローバルにならなければならないのは、技術だけでないことを強調する必要があります。世界中でディズニーやポゴ・チャンネルは見るのに、世界の様々な人々の中に同じ愛があるということが、私たちに見えてこないのはなぜでしょうか。もしもメディアが、生きることの持つ単純な真実を明らかにする役割を積極的に果たすなら、平和な世界は、作文のテーマだけにとどまらず、現実のものになるでしょう。

国境を越えて平和を発信する

（原文は英語）

アナ・ロサリオ・A・エリカーニョ（24 歳）

フィリピン・ムンティヌルパ市

ある国際青年会議で、私は親友二人と巡り合いました。私たちは、それぞれ郵便番号の違う故郷に帰りましたが、その後も毎週、話をすることができました。インターネットとコンピュータ、マイク付きヘッドフォンのおかげで、長距離の会話は、友情と同じように、全く無償で続いています。

メディアと通信技術が、今日ほど、パーソナルで広い地域を網羅するような存在になったことは未だかつてありません。私の両親がティーンエージャーだった頃は、アジア近隣諸国の人々について知っていたことは、百科事典と白黒テレビからの情報でした。私の想像では、両親が得ていた情報は大まかで、ひょっとしたら型にはまったものであったかもしれません。それから 40 年、大海に隔てられているにもかかわらず、私は外国の友人たちをより深く理解することができるという恩恵に与っています。友人に、お気に入りの国内のバンドのウェブサイトを簡単に案内することができます。友人たちも同じく簡単に、インスタント・メッセージを利用して、その日の職場での出来事を私に話すことができます。

私は、メディアと通信技術が親密な絆をもたらしてくれたことに感謝しています。おかげで人々とその文化をより深く理解することができるからです。これは、私たちの世代が、より平和な世界を実現する能力に優れていると、私が考える理由でもあります。メディアと通信技術によって、幅広く多文化にわたる情報に触れられるようになりました。憎しみと偏見が無知から生まれるとするならば、情報と理解は思いやりと共感を生み出せるはずです。

私は、フィリピンのある青年組織が、マニラ首都圏の学校とミンダナオ島の学校の生徒たちによるビデオ会議を始めたという話に勇気づけられました。大画面で初めて顔を合わせた、それぞれの学校の生徒代表たちは、リアルタイムで語り合いました。彼らは、好きな科目や楽しい課外活動について話したり、ミンダナオ島の紛争や、自分たちが平和についてどう考えているかを語り合いました。さらに重要なことに、お互いの第一印象が、わずか 30 分のビデオ会議の後でどのように変わったかについても話しました。その模様は、学校の先生、保護者、同じ学校の生徒、地域社会の人たちに見守られました。

その日、かなり多くの人の人生が変わったと、私は確信しています。マニラ首都圏の生徒にとって、



南部のミンダナオ島に住むイスラム教徒は「分離主義者」や「テロリスト」というレッテルを貼り、分類する存在ではなくなったことでしょう。ミンダナオ島の生徒にとっては、マニラ首都圏が自分と自分の家族を一瞬にして難民にしてしまう兵士に代表されるような存在ではなくなったでしょう。どちらの生徒が会ったのも、自分と変わらない子どもたちだったのです。30 分のビデオ会議から始まったことが、生涯にわたる、理解と真の絆として生き続けてくれることを、私たちは願わずにはいられません。

メディアと通信技術が邪悪な目的で利用された場合には、どうなるのでしょうか？ その結果は実に悲惨です。結局のところ、メディアは手段に過ぎません。悪の手に落ちれば、誤った情報や「ヘイト・スピーチ（憎悪発言）」が簡単に広められてしまいます。今日、そして未来のピースメーカーは、できる限り大きな声で、国境を越えて真実を広める手段を利用しなければなりません。英国のトニー・ブレア前首相は、新たな戦いをいみじくもこう表現しています。「マスメディアとコミュニケーションが瞬時にして全世界に強烈なイメージを伝えるため、軍事あるいは外交といった従来の手段を使うように、宣伝、思想、価値観を使って、戦いが行われることになる」と。

現在の「情報化時代」におけるピースメーカーとは、和を乱したくないあまり、傍観者の立場で沈黙を保つ人たちでないことは明らかです。ボノは音楽で、イランの匿名の書き手たちは自らのブログで、それを実践しています。メディアと通信技術のおかげで、ピースメーカーが大きな声で発言できる場がいくつも存在することは救いです。

各世代には、その世代ごとのピースメーカーがいます。私たちの世代のピースメーカーは、平和の種をまくだけでなく、メディアと通信技術を武器にし、国境を越え、平和を「発信する」人たちになるでしょう。特定の主張について語るピースメーカーもいれば、自分自身と自分の文化について人々に伝えていくという簡単なやり方で、つながりと理解を育んでいくピースメーカーもいるでしょう。

情報化時代における新たなピースメーカーたちは、銃や爆弾、戦車よりも、インターネットとブログ、テレビを選ぶということでしょう。

マスメディアは私たちを映す鏡

(原文は英語)

アレクサンドラ・ジレル (10 歳)

ベラルーシ・ソリゴルスク市

第 4 小学校

現代人は、新聞、ラジオ、テレビ、インターネットのない生活など想像もできないでしょう。マスメディアを通して、私たちは、たとえどんなに遠く離れた場所だったとしても、地球上の別の場所で起きた出来事について知ることができます。

現代技術の発達には、映画祭開幕の様子や MTV の授賞式を放送で見る機会だけでなく、ショックで言葉を失うほどの恐ろしいテロ行為を目撃する可能性ももたらしました。私が 4 歳の時、テロリストがアメリカの世界貿易センターを破壊しました。その瞬間、私は両親と一緒にテレビを見ていましたが、幼すぎてすべてを理解できませんでした。それでも、何かとても恐ろしいことが起きたことはよく分かりました。成長するにつれ、モスクワ（ドubroフカ劇場）とベスランで人質になったふつうの人たちの恐怖と痛みがよく分かるようになりました。

マスメディアによって、こうしたすべての人類の悲劇が、私自身の身に起きたことのように思えるようになりました。解放された後、やけどをして疲れ切ったベスランの児童がストレッチャーで運ばれるのを見た時、胸が痛みました。児童の多くは私と同じ年でした。私たちの生活でマスメディアがどんなに大切な役割を担っているのかが分かったのは、その時です。

現在、私は、イラクでの流血の惨事とガザ地区での戦争について読んだり、聞いたりしています。そうしたことを知ることは、私たちの世界がどんなに壊れやすいものかを理解する役に立ちます。ほんの一瞬にして、巨大な津波は、何千もの人々を地球上から消し去ります。ほんの一瞬にして、テロリストは、トルコにある大きなお店を吹き飛ばしてしまいます。そうしたことを知った後で、あらゆる人々が平和に暮らし、お互いの意見を尊重できるよう、全力を尽くしたいという、とても強い気持ちが湧いてきました。どうかお願いします、おとなや政治家の人たちは、暴力をなくし、平和的共存を実現するための解決方法を見つけてください。

もちろん、マスメディアは、そのなかでとても大切な役割を果たすことができます。マスメディアの助けを借りれば、別の国に住む人たちが、お互いに語りかけ、一つになって、よりよい世界を築いていくことができます。

でも、マスメディアが現実をいつも誠実に映し出しているとは限りません。新聞、テレビ局、インターネット・サイトのなかには、時々、人々に暴力や残酷な行為を呼びかけたり、子供のものを含むわいせつ物を配布したり、テロ組織や破壊的な宗教団体の活動を宣伝したりするものもあります。世界にそんなマスメディアがあってはなりません。そういうマスメディアは、人類に敵対し、私たちの世界と生活を破壊するからです。

ですから、あらゆるジャーナリスト、編集長、プロデューサーの一人一人に、私たちが見たり聞いたり読んだりするものに対する責任があると、私は考えます。もしかしたら、マスメディアを利用し

で憎しみや戦争を広めることに、厳しい罰を与えるべき時がきているのかもしれませんが。

もちろん、私たちはよりよい自分になるべきです。一人一人が正直に暮らし、情け深い心を持って立派に生き、世界と身近な人たちを愛するべきです。そして、私たち自身が変われば、マスメディアも変わることでしょう。実際、マスメディアは、まるで鏡のように私たちの生き方を反映しているのです。古いロシアのことわざはこう言っています。「自分の顔が曲がっているのに、鏡を叱ってもしようがない」と。

残念ながら、現代のマスメディアの欠点の多くは、画面やインターネット・サイトで恐ろしいものや暴力行為を見たがる人々がいるという事実、何よりも起因しています。

地球温暖化のような問題を考えてみましょう。大気や海を汚すという、人間の非常識な活動のせいで、地球の気候が元に戻せないほど変化してしまうことについて、エコロジストたちは警告を出しています。気候が異常に暑くなったり、異常に寒くなったりしたことが伝われば、人々はそのことをよく考えるようになります。もちろん、全員ではありませんが、多くの人々が、自然に害が及ばないような生活を始めます。

私たち人間は、今あるものを保てるようあらゆる努力をするべきです。私は、世界がもっと良くなりうると信じています。そして、マスメディアを利用することで、私たちはそれを実現できるでしょう。

携帯電話のメッセージ——「平和にいこうよ、みんな！:p」
(原文は英語)

ユニサ・ラトナディラ・T・A・K (14 歳)
インドネシア・ジョグジャカルタ市
ジョグジャカルタ SMP 第 8 中学校

ご存知のように、学校とは、知識を身につけ、青春時代にできる限り多くの学問的・社会的経験を得るための、最も快適な場であるべきです。それが理想です。でも実際には、最近の学校は、もはや快適に勉強ができる場ではなくなっています。なぜでしょうか？ それは、学校の役割が変わってしまったからです。学校は教育を提供する場であるだけでなく、今では戦場とも呼べる場にもなってしまいました。なぜそう言えるのでしょうか？

学校が戦場と言えるのは、その至るところで競争の雰囲気満ちているからです。ここで私の言う「競争」とは、勉強での友達間の点取り競争のことだけではなく、むしろ、面子を保ちながら学校生活を送るための競争のことです。私の学校で、人と付き合い、友達を作るには、何かの集団に入らなければなりません。例えば、頭のよい生徒のグループや金持ち生徒のクラブ、おたくやチアリーダーのグループなどです。多数派に入るか、少数派に入るか、それが最大の問題です。これまでは、私も含めて生徒全員が、こうした状況に追い詰められ、この種の「ルール」に従って毎日生活することを強いられてきました。

この問題のせいで、私は時々、学校にいるのが本当につらくなります。学校では全く心の休まる場所が見つからないからです。私が気付いたところでは、クラブやグループなどの集団というものは、必然的に言い争いや嫉妬を生み出す土壌をつくってしまいます。私がそう思うのは、そういう状況にずっと身を置いてきたからです。ここで体験談をお話しましょう。

私のクラスでは、男女の性差に関する言い争いがよく起こります。大抵、男子と女子のあいだで言い争いになります。ほとんどの場合、その原因は、単純な誤解か自己中心的な考え方でしょう。冗談のつもりが個人に恥をかかせることになってしまったような場合も、言い争いの原因になり、クラスの中で男女間のコミュニケーションが行き詰ってしまうことがあります。こんな問題が起きると、クラスの雰囲気は、ヒマラヤ並みに冷え込むか、墓場のように静かになってしまいがちです。本当のことです。

こんな状況を見ると、私は胸が張り裂けそうな気持ちになります。心の奥底では、自分が中立でありたいと願っているからです。私は公平でありたいと思っています。男子・女子両方の話を聞いて、どちらとも仲良くしていたいと思っています。こんな状況にうんざりした私は、冷たい雰囲気を終わらせる方法を探していました。すると突然、あるアイデアがひらめいたのです！ アイデアがひらめいたのは、クラスメートのほとんどが携帯電話を持っていることに気付いた直後のことでした。

放課後になるとすぐに、私は携帯電話を手に取って、ショート・メッセージを打ち、それを8年2組のクラスメート全員に送りました。送ったメッセージは、「私の大好きな友達全員へ。平和にいこうよ、みんな！（8年2組）」。私にとって、それは一か八かの賭けでした。翌日の朝、クラスで何が起きるか予想もつかなかったからです。このせいで激しい怒りに、新たに火が付いてしまうかも。その夜は全然眠れませんでした。

翌日の朝、膝をがくがく震わせ、手に冷や汗をかきながら、私は教室に行きました。そこに着くまでは、クラスで起きていることを心のなかでやみくもに想像していました。しかし、教室の入り口の前まで行くと状況に驚かされました。何が起きていたと思いますか？ 男子グループのリーダーのエイビスと女子グループのリーダーのクリスティーンが会話していました。でも、今回は言い争っていません。二人は、笑顔を浮かべて笑い声をあげながら、楽しそうに話していました。その他のクラスメートにも、同じことが起きていました。皆がおしゃべりをしていたのです。何が起きたのでしょうか？

すぐに、エイビスとクリスティーン、クラスの皆が、私に歩み寄ってきました。皆が、私の送ったショート・メッセージにお礼を言ってくれました。メッセージを受け取るとすぐに、言い争いがクラスを分裂させていたことに気付いたと、皆が言いました。それまでは、こんなことを誰も言ってくれなかった。私たちクラスメート全員が、実はお互いを愛し、大切に思っていることを、勇気を出して指摘する人がいなかった。また、自分たちも本当は、仲間意識を取り戻したかったのだ、と言ってくれました。

その日は、私にとって夢のような一日になりました。自分自身の環境で平和を築く、という夢を実現する瞬間が訪れた日だったからです。その第一歩が、自分の最も身近な環境——友達——でした。技術が平和の種を友達に広める役に立つなんて、思ってもいませんでした。

この経験をもとに、私が心から願っているのは、世界のティーンエイジャーが私と同じことをしてみようと思ってくれることです。つまり、技術のメリットを利用して、友達間の言い争いによるコミュニケーションの行き詰まりを打ち破ることです。私たちにこれが実行できれば、平和の種は育っていくと信じています。そしていつの日か、私たちは、待ちに待った、平和という美しい花を見ることができるよう。さあ、携帯電話を手に取って、自分が本当に愛する人たちに、このメッセージを送りましょう。

「平和にいこうよ、みんな！:p」

（訳注）タイトルの「:p」は、舌を出している様子を表す顔文字です。

平和を発信

(原文)

根本 ゆかり (16 歳)

日本<米国・ミシガン州在住>

ミシガンバトルクリーク補習授業校

今まで世界中が「平和」であった事はあるのだろうか。私は初め、戦争のない世界を平和と言えると考えた。しかし戦争がなくても世界では格差や差別、私たちの母国日本でもいじめや自殺、家庭内暴力…平和だと言いきれない事実がたくさんある。これらの問題がなくなった時にこそ平和と言えるのだとしたら人類は今まで「平和」を体験した事がないことになる。そんなに「平和」とは難しい事なのだろうか。私は「平和」な世界を築く為には寛容の心をひとりひとりが忘れない事が何より大切だと考えている。例えば、身近なところではバスや電車でお年寄りに席を譲る事も平和に近づく第一歩だと思う。譲った方、譲られた方だけでなく、そのやり取りを見た周りの人間にも平和な心が生まれるだろう。では、世界の人達と寛容の心を分かち合うにはどうすれば良いのだろうか。

今日、インターネット上に自分のアルバムを持っている若者がたくさんいる。自分の写真、空の写真…なんでも携帯電話やカメラで撮り、掲載しているのだ。私はこのカメラとインターネットを使って平和な心を発信したいと思う。世界にはたくさんの言語があるし、文字を読むだけではお互いの考えを分かち合う事は難しいだろう。だが、それが写真だったらどうだろう。人種の違う人の写真でも、母親が生まれたばかりの赤子を抱き上げている写真を見ると自然と笑顔になる。説明書きなどがなくてもちゃんとその写真の中の母親の気持ちが伝わってくるのだ。だから私は、世界中の誰もが掲載できる写真のサイトを作る事を提案する。テーマは「自分が平和、安心を感じるものや時間、笑顔になれる瞬間」だ。例えば私の場合、中学生の頃先生や級友と校門の前で別れる時に見た、真っ直ぐ先に沈む夕日を思い出すと、なんて平和な一時だったのだろうと今でも思う。だから、1 日の始まりの空、湖や海ではしゃぐ人、家族を見守る優しい祖父の目…なんでも良いのだ。

もし何かを感じたり、考えたりしたらコメントを書いてもらうのも良いだろう。コメントには原則、写真の投稿者が自分の考えを主張する事を認めない事とする。こうする事で、積極的に閲覧者が自由に自分の考え、意見を書き込む事ができるだろう。そしてコメントが、異国の人が同じものを見て感じる事、考える事の相違点を知るきっかけとなれば良いと思う。お互いの考えを尊重し合えた時にこそ、寛容の心が芽生え、遠くの土地の人々をも理解できるようになると思うからだ。

ここで問題になってくるものが、その写真が適切かどうかや、言葉の壁だ。それらを解決するために会員制度を作る。会員は皆入会する時に平和な社会を築く事、自分の決断や行動に責任を持つ事に同

意する。その上で会員は写真、コメント欄を見て不適切なものがあればその場で消去し、自分と同じ国の人が母国語のままコメントをしていたら訳を付ける事も可能だ。こうした仕組みを作る事でマナーが守られ、利用者が安心してそのサイトに写真やコメントを掲載出来るのではないか。人々にこの活動を知ってもらうためにも 1 年に 1 度コンクールを開き、受賞した写真の展覧会を世界各国で開く事も良いだろう。

メディアは今後もっと平和的に国と国を繋ぐ架け橋になるべきだ。一般の人達もこのような同じ写真を世界中の人々と見合う事ができれば、全く遠い土地の全然違う人達がもっと身近に感じる事ができるだろう。直接平和活動をしなくても、自分が「写真を撮る」だけで世界で孤独を感じている人、思い詰めている人、疲れている人達に何か感じてもらえ励みになったら、その写真を見て人々の間に寛容の心が生まれたら、世界は平和に近づけるのではないだろうか。つまらないと思う毎日の中に、誰しもが安心できる時間や場所、ものがあるだろう。平和を築くために出来る第一歩、まずは自分の周りの幸せに気づき、それを世界に発信する事から始めてはみてはどうだろうか。

互いの話を聞き、自分の内なる声を聞く——
持続的な平和の場を創出する「ラジオ・フォーラム」の必要性
(原文は英語)

サラ・J・ウォルコット (25 歳)

米国・カリフォルニア州

ケニア西部のエルゴン山では現在、暴力の嵐が吹き荒れています。ウガンダ国境に近い山麓では、地元部族と政府の「治安」当局者が殺し合っています。「平和なケニア」独立以来、最大規模の暴力行為が発生し、家を失った 4 万人以上が国内の他地域とウガンダに逃れる一方、何百人という女性と子供がレイプされ、性的暴行を受けました。地元の平和維持組織と地域社会の指導者たちと話したところ、明らかな原因は「土地争い」だが、数十年にわたる政府による周縁化（人々を社会の中枢から周辺に追いやる政策）もまた、主な根本原因であると教えてくれました。この場合の「周縁化」とは、「お粗末な統治」とも言い換えることができます。

エルゴン山地域社会の指導者たちは、政府が自分たちに注意を払ってくれず、絶望していると繰り返し語りました。国の指導者や国民に、彼らの声を聞いてもらえる場はありませんでした。ケニアに住んでいた時、私は、行く先々でこの種の周縁化を目の当たりにしました。人々は、声を聞いてもらえる場を——そしてお互いの声を聞くことのできる場を——求めて叫んでいました。これは、ケニアだけでなく世界中における真実です。周縁化が紛争の主たる要因になっていることは多いものです。従って、生活に影響を与える意思決定プロセスに、一般市民から大統領に至るまで、あらゆる人々をもっと取り込み、参加させるための方法を積極的に創り出していくことが、平和への取り組みには不可欠なのです。

平和とは、暴力的紛争がない状態としてのみならず、多様な人々のあいだの持続的、献身的な敬意を伴う関係としても理解されなければなりません。平和とは、結果ではなくプロセスです。言い換えれば、ダライ・ラマが言ったように、「平和に至る道はない、平和こそが道」なのです。コミュニケーションは、持続的な関係を築くうえで最も基本的な側面の一つです。極めて重要なのは、継続的にそうしたコミュニケーションの場を設けることです。

私は、世界的規模のラジオ・フォーラムの創設を提案します。これは、週一回の全国放送のラジオ番組で、人々が、公共の利益——特に天然資源の利用と処理——について、政府や企業などの力を持つ団体と話し合うことができる場です。このフォーラムは、社会の周縁に追いやられた人々に、話を聞いてもらう場を提供するだけではありません。同時に、政策立案者と企業のリーダーに対し、このフォーラム以外では聞く機会がないであろう人々の話を聞いて、自分たちの活動が人々の生活に本当

はどのような影響を及ぼしているのかを探る機会を与える場にもなります。周縁に追いやられた人々と体制の「中枢」にいる人々とのあいだには、現在、コミュニケーションが欠落しており、それがあらゆる人に害を与えています。両者が互いの話に耳を傾ける——怒鳴る、あるいは不満を言うだけでなく、実際に話をして傾聴する——そんな方法が見つかれば、あらゆる人の人間性が豊かになることでしょう。話し合いを放送に乗せ、広く一般の人々が聞くことで、説明責任を強化する機会にもなり、現在起きていることについて人々が知識を深める一助ともなるでしょう。また、こうした話し合いを、政財界や企業の利潤に独占されることなく、公共の場で継続されることを保障することにもなります。国内政治の潮流の変動に影響されず独立性を保つために、番組の資金調達先として、中央政府と国際組織の両方が考えられるでしょう。

こうした週一回の番組を、あらゆる国で放送することも可能でしょう。番組の進行役を務める熟練した司会者は、上院議員や企業のリーダーから農民や国内難民まで、あらゆる人々にアクセスする手段としてのラジオに情熱を傾ける人物です。

各国の話し合いの様子は、すべてオンラインで配信されます。共用のウェブサイトを利用して、各国とその番組がそれぞれ付随するオンライン・フォーラムを設けることも可能です。そこでは、意見をはっきりと述べ、個人、地域社会、居住環境に関する問題を提起し、その共通点を見出す機会を提供できます。そんなふうに全世界で深く考えることで、すべての関係者がこうした問題にどのような対応を求められているかが明らかになります。オンライン・フォーラムは重要ですが、ラジオ番組自体から関心が逸らされることがあってはなりません。発展途上地域の大部分の人々は、オンライン・フォーラムに参加できるほど、インターネットへのアクセスが無制限にあるわけではないからです。

番組のプロデューサーは、世界各国の「同僚たち」と定期的にコミュニケーションを取り、お互いの経験から学ぶことができるよう、独自のオンライン・フォーラムを設けます。

私は、暴力的紛争を予防、解決するために、これだけで十分だと言うつもりはありません。しかし、話し合いを促進することは、非常に多くの紛争の根底に横たわる分裂を修復する一助となることでしょう。

200 通の E メール

(原文)

尾沢 百音 (9 歳)

日本 < 米国テネシー州在住 >

中部テネシー日本語補習校

私はかん国人のお友だちがいます。最初、その子はいくらもわたしの事が好きじゃありませんでした。どうしてかというとその子は昔日本がかん国とせんそうしたのを知っていたからです。でもわたしはその子と毎日のようにいっしょにあそんでいたの、日本人の全いんがわるいのではないとみとめてくれました。わたしはその時とてもうれしかったです。でも今年その子がかん国に帰ってしまいます。せっかくすごくいい友だちになったのにとてもさみしいです。

わたしが思った事はもしその人の事をよく知ったらもっとどういう人かわかってわたしの事もちゃんとりかいてくれると思います。わたしかん国人のお友だちが私にわるい人じゃないってわかってくれたようにいろいろな国の人の事もわかると思います。だからインターネットでいろいろな国の人とメールしたらもっともっと色々なことを知ってわかっていくと思います。

もし世界中の国の人にメールをしたらどうなるかなー？ どうやったらいいのかなー？ どのくらいの人かすんでいるのかなー？ まず地球にはどれだけの国があるか考えてみました。最初わたしは 150 ぐらい国があると思いました。そのつぎどうやったらそれをしらべられるか考えました。わたしはコンピューターで調べられると思ったのでインターネットをみてみました。コンピューターによるとだいたい 200 国がありました。わたしは国の数が多くてびっくりしました。

次にその 200 か国の一人一人づつにメールをしてみたらどうなるでしょう。どんなへんじをしてもらえるかなーたのしみだなと思います。そういう風にすると 200 の国の様子がよくわかるようになり、日本の事もよくわかってもらえる様になると思います。

わたしだけでなく世界の人びとが同じ事をしたらどうなるでしょう。もしかしら世界中の人が友だちになれるかもしれません。世界の人々が色々な国の人とメールをする様になる日が来るかもしれません。みんな 200 人の友だちが出来るなんてすごく素晴らしいことだと思います。世界の人々が他の国の事をよく知りみとめ、りかいてくれるようになると思います。そうすると国としてみるのではなくそこに一人の友人として見るようになり、そこに居る人も好きになってくれるかもしれません。わたしかん国人の友だちの様に・・・。

昔せんそうがあったせいでわたしとその子は友だちにならなかったかもしれませんでした。だからせんそうはよくないと思いました。私一人の力ではせんそうは止められないと思います。でもまず

知らない国の人一人にメールをしてみましょう。それがだんだんふえて世界中の人が知り合いになるでしょう。はじめは小さくてもだんだん大きくなってせんそうをとめられるかもしれません。そんな日が来るといいと思います。わたしは平和な社会をつくるためにインターネットをこういうふうに使いたいです。

平和は愛から始まる (原文は英語)

ウェンディル・エルマック・メヒア (12 歳)
フィリピン・イリガン市
ティパノイ小学校

世界から戦争がなくなれば、平和になります。平和は国々が発展する助けになるため、とても重要です。平和な時代には、作物が植えられて収穫され、売り買いが行われます。

話す言葉が違っていても、平和な時代ならば、人は互いに助け合います。地震や津波、地滑りなどの自然災害が起これば、人々は、食べ物、衣服、毛布、食器や調理器具を、被災者と分かち合います。聖書のマタイによる福音書 22 章 39 節には、『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ。』と説かれています。人々や国が自分たちの資源を災害に見舞われた隣人と分かち合うのは、隣人を愛する一例です。災難にあった人たちは、親切な隣人が与えてくれるものを受け取って幸せな気持ちになります。それが愛ではないでしょうか。そうして、喜びと平和で人々の心が満たされるのです。

戦争がおこると、人々はパニック状態になり、他の場所に避難します。避難先の学校の建物には、食べ物もスペースもあまりありません。アブサヤフがフィリピン政府と戦っていると、大勢の人たちが殺されます。人々は避難するしかありません。私は、自分の国でも、世界のどの国でも戦争が起きてほしくありません。

平和の文化を築くためにメディアが役に立てることは何なのか、私にはどんな提案ができるでしょうか。メディアに対する私のささやかな提案は、愛と平和についての番組を毎日、放送することです。例えば、世界の色々な宗教が愛と平和について信者にどのように教えているのかを紹介する番組などです。

私はキリスト教徒です。イエス・キリストの物語を読み、聞くのが大好きです。イエス様は奇跡を行いました。5 切れのパンと 2 匹の魚から、お腹を空かせた 5 千人の人々に食べ物を与えました。イエス様は食べ物に神の恩恵を祈りました。そして、お腹を空かせた人々に食べ物を与えたのです。また、イエス様は、病気の人たちや目の見えない人たち、足の不自由な人たちを癒されました。それに、幼い子供たちのことを愛しました。メディアがイエス様の物語を紹介することができたら、キリスト教徒が何を信じているか、なぜそんな行動をとるのかが、他の宗教の子供たちにも分かるでしょう。

私は、ムスリムの人たちについて少しだけ知っています。彼らは、アラーと呼ばれる神と預言者モハメッドを信じています。彼らの宗教はイスラム教です。彼らが祈る時には、神であるアラーに対してひざまずいて額を地面に付けます。彼らの聖書はコーランと呼ばれます。彼らも 1 つの神を信じており、金曜日にはモスクで礼拝を行います。

私は、この他の宗教に関して全く知りませんが、メディアが世界の偉大な宗教についての番組を放送し、そのなかで礼拝する家族やコミュニティでの暮らしぶりを紹介してくれれば、子供たちは、世界の他の子供たちの文化がよく分かるようになります。他の子供たちがなぜそういう生活の仕方をしているのか理解できるようになるでしょう。こうしたことが、友情と国際平和につながっていくのです。

一生懸命勉強する子供たちが、大きくなってから幸せな人生と明るい未来を手にするという実話を、映画業界が映画化することもできるでしょう。

また、職業訓練に関する番組は、世界の人々が仕事に就くのに役立つでしょう。仕事に就ければ、人々は子供たちを養い、子供たちにより教育を受けさせることができるようになります。幸せな子供たちは平和を愛します。その子供たちは、家事を手伝うので、家庭に平和と愛が保たれます。

つまり、テレビなどのメディアで良い番組を見ることで、世界中の子供たちが幸せなることを学び、平和を愛するようになります。

平和は私から始まるのです。

平和への第一歩

(原文)

坂本 百合香 (13 歳)

日本・大阪府

東大阪市立英田中学校

「知る」という事は、とても大切だと思います。それは、どんな場面においても言えることです。例えば、温暖化による地球環境問題。これは、私たち人間が多量の温室効果ガスを排出することによって起こっていますが、多くの人々は、その原因が自分にもあることを自覚していません。しかし、メディアを通して、正しい原因を知ることができれば、身の周りのことから、少しずつ改善して、いずれは、現在上がりつつある地球の気温を下げられるようになるかもしれません。

今、社会では、世界の現状を知っている人は少ないと思います。私もそんなに知りません。だから、知らなくてはなりません。今、どこで、何が起きているのか、そのために私はなにができるか。でも情報が足りません。私から見てみると、このごろのテレビ番組では、食べ物を粗末に扱ったり、くだらないことで笑いをとろうとしたり、それを見ていて、もっとこの時間を有効に使えないのか、と思います。例えば、最近話題の早食い大会や、大食い大会は、どちらにしろ食べ物をたくさん使っています。お皿いっぱい盛られた食べ物を、選手の人たちはまるで、野獣と化したかのように、かきこみながら食べ、口からぼろぼろと、くずをこぼします。日本では、食べ物をある程度たやすく、手に入れることができますが、すべての国がそうとはかぎりません。今、この瞬間にも、食べ物に飢えて死んでゆく子どもは、世界に何百人、何千人といえるのです。もし、そんな光景を貧しい国の人が見たら、どう思うでしょう。私だったら、目の前にある現実を受け止められないと思います。日本では、豊かになりすぎて、周りが見えなくなっている人も多いです。ほとんどの子どもが嫌がる勉強すら、したくてもできないところだってあるのに、私の通っている学校では、教科書をやぶいたり、ゴミ箱へ捨てる人がいます。それに、お弁当の時間が終わった後の教室には、ふまれたトマトが落ちていたり、もう何か分からないくらい潰れたおかずが落ちていたり、とても悲しいです。でも、そんなことはめずらしくありません。そして、こういった現象の大半は、私達がよく見るテレビの影響なのではないのかと私は思います。難しく説明するのではなくて、だれでも関心をもてるよう工夫しなければなりません。いかに分かりやすく、心にひびくように伝えられるかが、メディアの役目であり、責任だと思います。そして、悪い事も良い事も隠さず、真実を教えてほしいです。誰だって、自分に不利なことよりも、有利なことの方がいいと思います。でも、それを乗り越えて、真剣にむきあうことができたなら、今まで見えなかったものが見えて、前へ進むことができるのではないのでしょうか。だか

ら今、この地球で起こっていることを鮮明に伝えて、私たちにもできる限りの可能性を示すべきなのです。でも、いくら相手が伝えようとしても、伝えられる側の「知ろう、分かつよう」という気持ちがないければ、十分な知識は得られません。では、こんな活動をしたら、こういう得になるということをもっと広めたらよいのではないのでしょうか。そしてインターネットが発達する現代、これを使って呼びかける運動は、同時に世界への呼びかけにもつながります。世界中の人々が、今すべき事を見つけ、それに集中したら、どんどん物事は良い方向へ進むでしょう。そして、どんなときも忘れてはいけないのは、真実を知りたいという心であり、関心をもつということが、平和への第一歩でもあるのです。

情報により広がる僕の世界

(原文)

副島 和樹 (13 歳)

日本<マレーシア・クアラルンプール市在住>

クアラルンプール日本人学校

インターネット、雑誌、新聞などメディア情報があふれている現在、僕達はこれらの渦の中心にいて手を伸ばせば瞬時に世界の裏側の情報を入手する事ができる。でもその情報がなかったら、と考えた事は皆あるだろうか。僕は以前情報が少なく、NHKも見れなかったインドに住んでいた事がある。その時の体験を書きたい。インドでは日本ではなかなか知り合えない国々の人と出会えた。パキスタン、アフガニスタン、ヨルダン、イラク。皆顔や肌の色は違うけど、当時流行したゲームや映画が好きなのは皆一緒だった。僕が貸したゲームや読めないはずの日本の漫画を嬉しそうに持って帰り、甘すぎるお菓子をくれるまっ白な歯をした彼らが大好きだった。僕らは、小さな情報の接点で友達になった。それから以前だったら「それどこの国？知らない。」で終わっていた彼らの母国から目が離せなくなった。「今A君が住んでいる国。」「僕の住んでいた第2の祖国インド。」「行った事のあるB国。」という意識を持ってそれらの国々のニュースを見る様になり、新聞の片隅の小さな記事でその国々を見つけても、家族にあわてて見せに行ったり切りぬいたりした。日本に関しても同様で、日本を離れてよけいに日本に注目する様になった。まるで日本好きの外人みたいに寺、日本史、和菓子、尺八など日本的な物が大好きになった。「和樹の和は日本という意味だしそうなる運命だったんだよ。」と名前を付けた父は笑った。だから日本からのニュースにもワクワクした。随分と送れてやって来る雑誌、漫画もとても待ちどおしく流行や広告の新製品を見るたびに、帰国したら全部買うぞとはりきった。限られた情報だっただけに日本からの情報は貴重だった。一つ一つのニュースでも「へえ、今日本はそうなんだ。」とか「インドとパキスタンが仲良くなったんだ、よかった。」と嬉しくなったり「また自爆テロ、B君大丈夫かな？」と心配になったりした。

だからニュースを発信し情報を集める人達に一つお願いがある。本の小さなニュースでも待っている人がいるという事を十分に意識し責任を持って、ちゃんと真実のみを伝えて欲しい。誤った情報は戦争をもまきおこす可能性があるのだから。

以前、ヨルダンの死海が無くなりつつあるというニュースを見たのでおどろいてヨルダンの友人にEメールを送ったら随分遅れて返事が来て「そうなんだ？知らなかったよ。じゃあ早く遊びにおいで。でないと死海がなくなっちゃうよ。」と書いてあった。死海が無くなるというのは知らなかったのでおどろいたけど、彼の「早くおいで。」というのが何だか妙に嬉しくて「シュクラーン。うきはは持たず

に行くからね。」とすぐに返信した。

平和の祭典
(原文は英語)

エルマド・オチエン (14 歳)
ケニア・キシイ市
ジョークビラ中学校

……ゴー、ゴー、ゴール！ アレ、アレ、アレ……

僕は、世界中の人々と一緒に歌い、体を揺らしていました。父さんの隣のお気に入りの席に座って、わが家のテレビに目が釘付けになっていました。その時はまだほんの小さな子供でしたが、1998 年の FIFA ワールドカップのことは今も記憶に焼きついています。

世界的に有名なミュージシャン、リッキー・マーティンが、ステージ上で大会公式ソングの『ラ・コパ・デ・ラ・ヴィダ (カップ・オブ・ライフ)』を歌っていました。この曲は、世界中のサッカー・ファンのあいだでたちまちヒットしました。

トゥ・イ・ヨ！ アレ、アレ、アレ、アレ
ゴー、ゴー、ゴール！ アレ、アレ、アレ……

歓声と声援が響き渡り、涙がとめどなく流され、熱気は最高潮に達していました。激しい興奮と混乱、血と汗——サッカーの熱狂——の季節が再び訪れていたのです。どの国の代表チームも一番いいユニフォームを着てやって来ました。ファンたちは自分の国をテーマにした服や装飾品でおめかしをしていました。1 カ月間、メディアと情報通信技術のおかげで、世界中の人々が一連のサッカーの楽しみを満喫することができました。そのクライマックスは、フランス対ブラジルの最終決勝戦でした。

1998 年の FIFA ワールドカップ・フランス大会の成功は、メディアと情報通信技術のおかげだったと言って間違いないでしょう。世界中のテレビ局とラジオ局が大会のニュースを放送しました。インターネットのサイトは、大会に関する最新情報を伝え、活気にあふれていました。各企業は、幅広い視聴者層に製品をアピールしようと競い合っていました。刻々と変化する情報のおかげで、大会は活気にあふれ、インタラクティブものになりました。

メディアと情報通信技術は、広い範囲にいる人々をつなぐために用いられます。利用される手段としては、電話や電報、ラジオ、テレビ、インターネット、雑誌、新聞（印刷媒体と電子媒体）などがあります。伝えられる情報の形態は、ニュースや広告、エンターテインメント、啓蒙活動などです。こうした技術は、商業、教育、科学、文化、生活スタイルを発展させるうえで基本的な役割を果たしてきました。

マイナス面としては、腐敗、悪政、身内びいき、地域主義、過激主義などの、社会をむしろむたくさんの悪徳を広めるために、メディアが利用されてきたことが挙げられます。今も記憶に新しいのは、1994年にルワンダとブルンジで起きた部族紛争です。この時は、フェリシエン・カブガという名のルワンダ人が、自らが所有するラジオ局を利用して、フツ族とツチ族のあいだの暴力を煽りました。この紛争は、戦闘に加わった人にも加わらなかった人にも痛手を与え、100日間でおおよそ200万人の生活を破壊しました。ですから、メディアと情報通信技術を適切に管理する大切さをいくら強調しても強調しすぎることはないのです。

将来、メディアと情報通信技術は、悪徳に立ち向かい、平和の文化を育むために利用されるべきです。この目標を達成するためには、世界共通の2つの有力な表現手段である音楽と劇場芸術（映画）の利用方法を見直す必要があります。これらは、善きにつけ悪きにつけ、聴く人々・見る人々の心を動かし、これらに触れていなかったらしきようなことをさせるための有効な武器になります。なぜなら、音楽と劇場芸術は、人の心の内側に訴えかけるため、人間の意識的・無意識的決定の基本となる感情、知性、意思に影響を与えるからです。

また、音楽は、社会的・人道的目標のもとに人々を一致団結させるために利用されるべきです。例えば、1984年に厳しい飢饉に襲われたエチオピアの場合、残念なことに中央政府は国際社会に実情を公表したくないと考えていました。しかし、モハメッド・アミンというケニアの写真家が密かにエチオピアに入り、餓死寸前の人々の悲惨な光景を撮影、メディアを通してそれを世界中に伝えました。その結果、マイケル・ジャクソンやライオネル・リッチーなどの大勢のミュージシャンが協力し合い、広く世界の人々に知ってもらい寄付を募るために『ウィ・アー・ザ・ワールド』という曲を制作しました。そうして、一世代丸ごと死滅するところを救われたのです。

効果的に平和というものを植えつけるために、僕なら、5年に1度、**世界平和音楽祭**を開きたいと思います。この音楽祭は、世界中の有名ミュージシャンを招き、それぞれの住む大陸の特定の都市で同時に演奏をしてもらい、それを世界中のテレビ、ラジオ、インターネットで生中継する、というものです。音楽祭の最後を飾るのは、ユネスコ提供の賞の授賞式です。これは、自分の曲を通して平和を推進したミュージシャンに贈られる賞で、ファンによるインターネット投票と選り抜きの幅広い層からなる審査員団による投票で選ばれます。

音楽祭は慈善公演とし、その収益金は紛争地域に人道支援を提供するために役立てられます。

……ゴー、ゴー、ゴー！ 平和に向って、ピース、ピース……

笑顔で平和を目指そう！

(原文はドイツ語)

マルガリータ・ミシノワ (17 歳)

ブルガリア・ブルガス市

ゲーテ高等学校

何もかもあっという間の出来事でした。マリアは、自転車に乗った次の瞬間、気が付くと地面に倒れていました。片方の脚が折れていました。医師の診断を聞いたマリアは、すっかり落ち込んでしまいました。学期が終わるまでの一カ月間、ベッドに寝ていなくてはならないと言われたのです。友達や同級生は、勉強があるので、滅多にお見舞いには来られません。寂しい気持ちで二日間過ごした後、マリアは父親から古いノートパソコンをもらいました。このノートパソコンの最大の魅力はインターネットに接続できることでしたが、それも友達がいなければ退屈でした。マリアは音楽を聴いたり、映画を観てみようとしたりしたのですが、何をしてもあまり興味が湧いてきませんでした。ある日の雨降りの午後のこと、ニュースに耳を傾けていると、「戦争」、「死」、「病気」といった言葉が聞こえてきました。マリアは、祖母が第二次世界大戦について話してくれたことを思い出し、そのことを考えてみました。「これは絶対に二度と起きてはならないことなの」と祖母は言っていました。

まさにその時、「戦争をなくすためには、自分に何ができるのだろうか？」という考えがマリアの頭に浮かびました。彼女は絶望と不信感にとらわれるのではなく、自分の持つ考える力を使いました。

「戦争がなくなるには、人々が何かで一つに結ばれていなければならない。これはよいアイデアだわ。人々が互いに助け合い、幸せになり、友達にならなければ」。マリアが窓越しに外を見ると、幸せそうな子供の姿が見えました。その子の笑顔は、まるで天使の笑顔のようでした。「笑顔！これが第一歩になるわ」

しかし、片脚が骨折している女の子が、どうすれば笑顔を広めることができるのでしょうか？ マリアは身の回りを見回しました。ノートパソコンが近くにありました。彼女が希望を託したのは……インターネットでした。インターネットは人類をつないでいます。「笑顔」というメッセージも、インターネット上で見ることができれば、皆に届くでしょう。でも、それで十分でしょうか？

マリアが見ると、友達の一人がネットワークに接続中でした。彼女は、彼に自分のアイデアを話し、自分のメッセージを彼の E メール友達全員に送ってくれるよう頼みました。彼はそうすると約束してくれただけでなく、「僕は友達と一緒にグラフィティを描いているんだ。僕たちが幸せそうな人たちの絵をたくさん壁に描けば、それを見た人たちも笑顔になってくれるね！」と言ってくれました。彼以外の友達も、マリアのアイデアに興味を持ってくれました。ある友達は、「スマイル」と書いた T シャ

ツを作ることができると言ってくれました。友達などと一緒に話した後、ジャーナリストとして働きたいこのベティが、病院にお見舞いに来てくれました。ベティは、「平和」というテーマに興味を持ち、マリアにこう言いました。「メディアを巻き込んだらどうかしら？」

マリアは、「メディア」という言葉をよく耳にはしていましたが、その本当の意味はよく分かりませんでした。「メディアは、人々に何かを伝えるために存在しているの。メディアは世論を変えることもできるのよ。インターネットや新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、映画、音楽はすべてメディアなの」マリアはすっかり夢中になりました。ベティは、マリアのアイデアを基に「笑顔で平和を目指そう」という名前のプロジェクトを企画すると約束し、それをベティの上司に見せたいと言いました。この素晴らしいアイデアならば、新聞業界と雑誌業界を一つにつなぐことができると彼女は考えました。

真夜中には、あるプログラマーが、メッセージを多様な言語にして E メールを出してはどうかという提案をしてくれました。この E メールを世界中に送信すれば、人々が笑顔になるだろうということです。多様な言語の利用というアイデアに、言語学者や学生が関心を示しました。彼らは、あらゆる種類の言語について「笑顔」の訳語を見つけると約束してくれました。こうした熱意のこもった反応に、マリアは驚かされました。その頃には夜更けになっていたのもう眠る時間でした。マリアが笑顔で眠りについたのは、この夜が初めてのことでした。

翌日は大変な一日になりました。まず、いとこのベティの友達と話をしました。その人は PR 業界で働いていて、たくさんの製造会社が、例えば小さなラベルのようなかたちで、自社商品に笑顔を印刷することに同意するだろうと言いました。ベティの父親はテレビ局の社長です。マリアは、彼から手紙を受け取りました。手紙には、彼がプロジェクトをとて気に入ったことと彼自身にアイデアがあることが書かれていました。まず、テレビ出演者全員が笑顔になり、ジャーナリストがよいニュースを報道するようにすること。ベティの父親は、「笑顔で平和を目指そう」を大掛かりなキャンペーンにしようと考えていました。マリアの期待は膨らみました。「おばあさんはもう生きてはいないけれど、今の私を見たら、誇りに思ってくれるだろう」とマリアは考えました。言語学者からの E メールは、次の日の朝、届きました。

Lächeln!	微笑み (ほほえみ, hohoemi), 笑み
Smile!	(えみ, emi), 笑顔 (えがお, egao)
تبسم , ابتسامة	미소 (miso)
Mousc'hoarzh!	Bişir!
Усмивка!	Risus!
微笑 (wēixiào)	Šypsena!
Úsměv!	Smil!
Smil! c.	Uśmiech!
Glimlach!	Sorriso!
Rideto!	Zâmbet!
Нумы!	Улыбка!
Sourire!	Fàite-gàire!, Fiamh-ghàire!
Glimlag!	Nasmeh!
χαμόγελο	Sonrisa!
Pukavy!	Leende!
ᲕᲗᲚᲘᲗ (khiyúkh)	చిరునవ్వు!
Mosoly!	ငယ်!
Senyum!	Gülüş!
Surriso!	Посмішка!
Sorriso!	Сυοί!

1 カ月後、松葉杖をついて歩けるようになったマリアは、幸せそうな人々や壁に描かれた笑顔の人々、商品に印刷された笑顔、そして新聞には悪いニュースだけでなくよいニュースも目にしました。隣にいたいところがこう言いました。「マリア、あなたが世界を変えたのよ!」。「いいえ」とマリアは答えました。「私ではなく、メディアが変えたの」。

私たちの現実、私たちの夢と同じ布地で織り成されている

(原文は英語)

ヨアンナ・ピエトウシャック (17 歳)

ポーランド・ロズキエ市

オゴルノクツアルカセ高等学校

作文を書く前に、私はティーンエイジャーの 2 つのグループを対象に調査を行いました。彼らが、テレビやラジオのニュースを見聞きした後で、どんな情報を覚えているのかを調べる調査です。その結果、調査対象とした 15 歳と 16 歳の生徒のうち、平和運動やボランティア活動に関する情報を聞いたり、心に留めたりした人は文字通り 0% だったことが分かりました。

マスメディアは世界で最も大きな力を持つ存在で、まるで「地球の王」のようです。この「王」の役割は、「彼の」「臣民」——つまり私たち——全員の上に平和、調和、友愛を広めることであるべきです。プロイセンのフリードリヒ二世は、「君主は国家第一の僕（しもべ）」という座右の銘を残したことでも有名です。私は、この言葉が「地球の王」から「地球という国家」に対するメッセージになるべきであると考えています。

第一に、マスメディアは、あらゆる人のニーズに対応すべきです。以前、学校で国際紛争についての授業を受けたことがありました。そこで私はこう考えました。バスク人は自分たちの国を求めている——彼らの声が誰にも届かないのは、なぜだろう？ このことで、私は自分の国の歴史を思い出しました。123 年のあいだ、ポーランドという国は地図に載っていませんでした。ポーランド人は、他国と同じ権利を持つ、独立国となることを望んでいました。世界中の新聞のなかで、私たちが代弁してくれた新聞がほとんどなかったのは、なぜだったのでしょうか？ 現在も、世界にはそその声を聞いてほしいと思っている国があります。そうした国々は、大きな声で話すチャンスを得るために助けを必要としています。マスメディアはなぜ、そうした国々に支援の手を差し伸べないのでしょうか？

テレビが政治のニュースや著名人のゴシップを洪水のように発信する一方で、飢餓で亡くなる子供の数は毎分 57 人に及んでいます。そうした子供たちは、私たちに何かを伝え、助けを求めて叫ぶことができる日を、必死で待ち続けています。「地球の王」は、裕福な生活を送る人たちの心を動かすことができるよう、そうした子供たちに広く社会に訴えかける機会を与えるべきです。マスメディアは、先進諸国の人々がそうした子供たちを助けることを促すように、彼らのことを伝えるべきなのです。

私は、歴史に深い関心を持っていて、歴史が 1 人ひとりの意識の形成に非常に重要な役割を果たしていると確信しています。過去を知って初めて、人は、過去の過ちを繰り返さずに新しい歴史を形作

ることができるのです。今後、メディアは、歴史的問題にもっと多くの時間を費やし、注目すべきです。私は以前、テレビで次のように主張する政治家の言葉を聞いたことがあります。今日の私たちはよりよい世界に暮らしていて、今や過去数世紀の過ちとは無縁だ、と。では、思い切って問いかけたいと思います。イラクでの戦争にはどんな意味があるのでしょうか？ イラクの一般市民はどういう生活をしているのでしょうか？ その人たちはなぜ、公民権を侵害されているのでしょうか？ 政府系メディアも独立系メディアも、本当の歴史を示し、説明するべきです。メディアの道徳的責任は、どうしたら紛争を未然に防ぐことができるか、つまり、人道心と思いやりを持ち、利他的な心を育む方法を教えることなのです。

あらゆる情報発信源にとって最も重要な対象は、幼い子供たちであるはずですが、将来、人権と人間の尊厳を十分に尊重するような勇敢な活動家となり、20～30年後の世界を形作っていくのが、今の幼い子供たちなのです。「三つ子の魂百まで」という古いことわざには、説得力があります。メディアは、明瞭かつ分かりやすいかたちで幼い子供たちに語りかけることが求められています。ジャーナリストは、本物の道徳的権威であるべきです。マスメディアは、地球の小さな住人たちに語りかけ、彼らの思考を刺激してはどうでしょうか？ 私は、子供たち自身が発言者となり、世界的な問題についての意見を表明する、「子供ニュース」があるべきだと強く確信しています。子供たちの意欲やアイデアを抑え込むのは止めましょう。よりよい世界を築くために、子供たちが知識を広められるようにしましょう！

異なる言語を知ることで、私たちは、世界中の仲間たちとコミュニケーションを取り、意見を交換し合うことができます。各テレビ局は、すべてのティーンエイジャーが外国語を学べる教育番組を放送すべきだと思います。OSCE（欧州安保協力機構）は、「欧州言語年」（2001年）を支持しました。ヨハネ・パウロ2世は、世界中のティーンエイジャーが集う日、「世界青年の日（ワールド・ユース・デー）」を提唱しました。「地球の王」も、若者を1つにつなぐ、こうしたアイデアからヒントを得るべきでしょう。

私は、外国の習慣や伝統、人生観、考え方を紹介、説明するテレビ番組を増やしたほうがよいと思います。「……ピアノの鍵盤は黒と白の2色でも、心のなかでは百万の音色のように聴こえる……」——ケイティ・メルアは自身の曲のなかでこう歌っています。これこそが肝心な点なのです。人々は、住む国によって異なっているからこそ、経験を伝え合う必要があります。あらゆる国々が一緒になって、素晴らしい親密な一体感を生み出すのです。

かつて、マルクス・トゥッリウス・キケロは叫びました。「人民の福祉が最高の法である！」と。さあ一緒に、「地球の王」にその言葉を伝えましょう。行動を起こしましょう！！ 私は夢想家なのかもしれませんが、ポーランドを代表する偉大な作家、ヴワディスワフ・スタニスワフ・レイモンは著作のなかでこう書いています。「私たちの現実、私たちの夢と同じ布地で織り成されている」。さあ皆と一緒に、世界平和という私たちの夢を実現させましょう。

皆さんティータイムにしませんか？

(原文)

佐藤 拓人 (18 歳)

日本<米国・ミシガン州在住>

ミシガンバトルクリーク補習授業校

世界中で民族、宗教間の内戦が耐えない今日、世界平和はどこか遠く、違う次元の世界に行ってしまったと思われがちだ。しかし、平和とは、もっとシンプルなものではなかったか。平和とは、心が安らぎ、体の力がうまく抜けて、リラックスしている時、そう、ちょうど午後のお茶を楽しんでいる時に感じるものと似ているものではないか。ならば、世界平和は、民族宗教に関係なく、世界中の誰もがティータイムをともに楽しめるティーテーブルを人々に提供することで、実現できるのではないだろうか。インターネット等のコミュニケーション技術が発達し、世界中の人々の距離がぐっと縮まった今だからこそ、このグローバル・ティーテーブル (G T T) の設置は実現可能なのだ。

世界中の誰とでも気軽に雑談を楽しめるティーテーブルの実現に、インターネットは願ってもない道具といえる。オンライン上では、世界中のさまざまな文化、背景を持つ人々が一斉に集まり、会話を楽しむことができる。しかし、既存のオンラインチャットには詐欺やその他の犯罪が常に付きまとい、楽しくお茶を楽しめる憩いの場とはいえない。G T T では、参加者全員に身分証明を科し、悪質な利用者を取り締まる委員会を各国に設置して、このようなトラブルを未然に防ぐ。ティータイムはみながマナーを守ってこそ楽しめるものであり、それを無視するものにはアクセス禁止などのペナルティーを科さねばならないだろう。こうしてセキュリティを強化することで、G T T は参加者に、今までにない安全な憩いの場を設ける。

G T T のサイトにアクセスした人は、無造作に選ばれた「テーブル」へと招待され、そこですでに会話をしている人たちに混ざり、雑談を楽しめる。無造作に対話相手を選ぶことで、利用者にさまざまな文化を持つ人々と、偏見による偏りなく平等に会話する機会を与えると同時に、深い親交を求める従来のチャットルームにありがちなトラブルを、未然に防ぐことができる。G T T は、ティータイムにするような軽い雑談をする場であり、互いを深く探り合うことを促しはしない。

偏見を取り払うことで見えてくる世界は、想像以上に広い。私は以前、韓国人の子と同じサッカーチームでプレイする機会があった。一緒にサッカーをして好きな選手の話をしているうちに、それまで持っていた偏見はすべて忘れていた。偶然、彼と同じ時期に同じチームに所属しなかったら、私は今でも韓国人に対する偏見を持ち続けていただろう。また、韓国人と理解し合うことが可能だとさえ思っていないだろう。G T T はこのような相互理解を促す場を設けることで、偏見のない、互いを理

解し会える世界の実現を促進する。

G T Tを実現させる上での一番の問題が、言語の壁である。しかし、この壁を越えることができれば、今までにないコミュニケーションの実現が可能になることも事実だ。今日人々は、母語のニュースを見ることで、世界の情報を得ている。しかし、この情報は報道機関により一度編集されているため、直接的に得た情報とのずれが生じることがある。このずれは時に差別や偏見を人々の心に生み、異民族の人々の相互理解を阻む障害となっている。たとえば靖国神社参拝に関する一連の報道は、私に先に述べた韓国人に対する偏見を抱かせる最大の要因だった。私は幸運にも、アメリカに住み英語で彼と会話ができたため、この固定観念を早いうちにとり払うことができた。このように、言葉の壁を取り払うことは、民族、宗教観の相互理解を実現するのに、絶対必要条件といえる。幸いにも、文章を自動翻訳する技術の著しい発展と比例して、言葉の壁は日々低くなっている。それと共に、世界中の人々のより深い相互理解を促進するG T Tの実現も、近づいているはずである。

ゆくゆくは、テキスト会話形式のテーブルから、音声、さらにはビデオ会話のできるものへ発展させていく。これには多大な翻訳技術の発展が必要になるが、昔人々が電球で明るく照らされた町など想像もできなかったように、この実現は大いに可能である。世界中の人々が家族で夕食を食べ一息ついたあと、ティーカップ片手に、今日あった出来事を、地球の反対側に住む文化も言語も違う人々と、談笑する、それが世界中に広がれば、世界平和も自然と訪れるのではないだろうか？

想像してみて、こんなゲームを

(原文は英語)

ヴェールレ・ヴリンツ (20歳)

ベルギー・ビルゼン市

マーストリヒト大学

想像してみて、決して終わらないゲームを。

想像してみて、世界を変えることになるゲームを。

想像してみて、別の視点から物事を見せてくれるゲームを。

想像してみて、こんなゲームを……

私たちは皆、「人生」という名のゲームのプレーヤーです。私たちは道を見つけなければなりません。その途中、障害、勝利、喜劇、悲劇に遭遇しますが、一番意義深いのは……自分と同じく人間である他の人々との出会いです。私は、自分の役割も知らず、20 年前にプレーを始めました。そして少しずつ、このゲームを、つまり人生で取りうる選択と方向性を、意識するようになりました。

私は自分の文化を見守るうち、私たちが新しい世界を挑戦的に形作っていくのを見てきました。私は 80 年代生まれです。8 歳の時、プレイステーションの発売日に並びました。10 歳の時には両親がパソコンを買い、12 歳の時には初めてのゲームボーイの画面をじっと見つめていました。90 年代に私たち子供が遊んでいたゲームは、害のないものでした。私たちは、キノコ王国で小さなぼっちゃり体型のイタリア系配管工になり、誘拐された王女を救い出すため、跳ね回ってコインを集めました。人生は単純で、常に善が悪に勝ちました。

私が成長してからは、ゲームの世界は暗い面を見せるようになりました。私は、友達がファーストパーソン（一人称視点）・シューティングゲームやリアルタイム・ストラテジーゲームを楽しんでいる姿を見かけるようになりました。放課後になると、友達は、パソコンやゲーム機のなかの自分だけの領域で、連続殺人犯へ変貌を遂げました。ショックだったのは、男友達が、カーマゲドンという、歩行者を車ではねることまで許してしまうレース・ゲームをやっていたことです。しかも、歩行者を車ではねてボーナス・ポイントまでもらっていました。最近のマンハントのようなゲームは、善が悪に打ち勝つことと全く無縁になってしまいました。プレーヤーは、犯罪者になり、最も残酷な方法で本物そっくりの人間を殺さなければならないのです。

フライト・シミュレーターが飛行の仕方を教えてくれるのなら、暴力のシミュレーター（模擬訓練装

置)は何を教えてくれるのだろうか？ その答えに、平和な夢などの余地はありません。

しかし……希望もあります！暴力的なビデオゲームがリアルになっていくのと同時に、新世代のデジタルゲームが人気になり始めました。それが戦略的人生シミュレーションゲームです。2000年に発売されたザ・シムズは、人の生活環境に非常に近い世界でのプレーを楽しむことを流行らせました。プレーヤーが求められたのは、「シム」たちで構成される家族の面倒を見たり、家や家具を買うといった選択をシムたちに代わって対話式で行ったり、シムたちを失敗あるいは成功に導いたり……別の言葉で言えば「神様のまねごとをする」ことでした。

このゲームの成功を受けて、ゲーム業界は新たな世界を創り出しました。セカンドライフです。これは、現実を仮想世界で「コピー」したもので、独自の経済システムを持ち、現実世界とのつながりも多く持っています。大企業はセカンドライフの世界に広告を出していますし、リンデンドルを現実のお金に交換することまでできます。

現実的なゲームは、いずれも資本主義世界を模倣したものです。そこで一番価値のあることは、「できるだけ早く成功して金持ちになること」。もし私がゲーム開発者だったなら、ゲームの目的を変えます。平和で平等な世界を夢見ていると言ったら、私は世間知らずでしょうか？ビデオゲームがそれを達成する方法を示すことができると言ったら、間違っているでしょうか？

私の開発するゲームではまず、セカンドライフのシステムに従い、世界のコピーを作製します。グーグル・アースのような地球規模の地図は、世界の画像を作製できるところまで進歩しています。地球にズームインして、聞いたことすらない場所を訪れることも可能です。しかし、このゲームでは、「あなた」が、金持ちになることを夢見る西欧諸国の個人主義者であるとは限りません。「あなた」は、リマのスラム街で生まれた子供、あるいは津波で家を失ったアジアの被災者になるかもしれないのです。それは運命が選ぶことです。

このゲームでは、獲得するのはお金ではなく、幸せのポイントです。誰かを助けたり、助けを受け入れたりすると、得点が上がります。見知らぬ人に親切な言葉をかけたり、手を差し伸べたり、人の話に耳を傾けたり、余裕のある時にお金を寄付したり、必要な時には寄付を受け取ったり、開発プロジェクトにボランティアとして参加したりすると、得点が加算されます。命あるものに対して攻撃的・暴力的な行為をすると、幸せのポイントは失われます。

毎日、難しい任務が与えられます。それに成功すると、幸せのポイントは大幅にアップします。しかし……任務は独力では実行してはならず、少なくとも他のプレーヤー一人との協力が必要になります。任務の例をいくつかご紹介しましょう。地域の皆で食べる巨大なケーキを焼くことや慈善団体のために何百着も洋服を集めること、さらには家を建てることも！こんな任務ならば、楽しいだけでなく、チームワークを奨励し、若者が現実世界で自分たち主導のプロジェクトを始める気持ちをかき立てることになるでしょう。

このゲームは、現実社会とつながりを持つものになります。ゲームのなかで挙げられたプロジェクトは、現実にも存在します。仮想版のプロジェクトに参加することで、現実版のプロジェクトに直接

貢献できます。世界各国をクリックすると、その地域が直面している問題について読んで知ることができます。異文化を学べば、固定概念を克服できます。世界中の人々と出会う可能性もあります。参加者全員が、自分のプロフィールを持ち、いつでも好きな時にチャットを始めることができます。

私が夢見るゲームに、「ゲーム・オーバー」はありません。一定レベルの幸せに達すると、あなたは新しいデジタル人格となって、自分の「幸せ」を分かち合うという選択をできます。平和な人生サイクルが新たに再開され、達成される夢は、世代を重ねるごとに大きく成長していくのです。

想像してみて、こんなゲームを……

平和な世界を築くために、メディアや情報通信技術が果たす役割

(原文は英語)

タラ・イヴォンヌ・フィン格拉斯 (23 歳)

アイルランド・ダブリン市

ダブリン大学トリニティカレッジ

「私たちの暮らしぶりを見てもらおう」と彼は言いました。私は顔き、水溜りに建つ彼の粗末な木造の家を撮ろうと、デジタルカメラを近付けました。私が南アフリカに来て 1 カ月余りが経っていました。その間、私は、エイズで親を失った孤児たちと遊び、飢えた人たちに鍋に入ったスープを配りました。それでも、この男性の家の写真は、依然として私の頭から離れず、写真を見る人すべてにショックを与えました。こうしてその写真は、使命を果たしたのです。

ジャーナリストたちは、事件を捏造し、過度に単純化しているとして非難を浴びることがあります。社会を支える 4 つの柱の 1 つとして、また、現状を監視する機関として、メディアは、一般の人々に情報を伝えるうえで重要な役割を果たしています。1980 年代、メディアは、エチオピアの飢餓に対する反響を全世界で巻き起こしました。おなかの膨れ上がった赤ちゃんや飢えで死にかけている人たちについてのメディアの報道が、人々に大きなショックを与え、その結果が行動に結び付いたのです。

「ピース・ジャーナリズム」と言われるこの種の報道こそ、平和な世界を目指す道です。ピース・ジャーナリズムは、「大義ある報道」としても知られ、問題に焦点を当てるだけでなく、考えられる解決策についても検証します。ジャーナリストのジョン・ピルガーは、武器貿易に関する報道で有名です。彼は武器貿易産業だけでなく、それに対する武器貿易反対運動についても詳しく調査しています。

ただし、ピース・ジャーナリズムには、指導と教育が必要です。紛争と人道的危機、緊急事態の報道方法についてのメディア関連研修が、ジャーナリストに提供されなければなりません。このような研修は、固定観念にとらわれた報道と誤報を減らすうえで役立つでしょう。注目を引きやすく、興味をそそることが求められるメディア報道では、ジャーナリストが、問題の本質を探るのではなく、情報を表面的に扱ってしまいたくなることもあるのです。

今日の新しい通信技術は、私たち 1 人ひとりに世界への仮想パスポートを与えてくれました。居心地のよい自宅でお茶を飲んでいるあいだに、残虐行為や人権侵害の映像がテレビ画面に映し出されては消えていきます。大人や子供が声を震わせながら、真の心の痛みと想像を絶するほどの勇気の物語を語ります。私たちはじっと見守り、耳を傾けています。

2003 年、世界中の人々がイラクで戦争が勃発する様子を目撃しました。国内に暮らすイラク人たちは、何が起きているのかを外の世界に伝えるため、ブログを書き始めました。バグダッドに次々と爆

弾が投下されるなか、イラク人たちは、ブログに自らの恐怖と体験をつづり、人々にそれを知らせました。彼らのブログは、『アンネの日記』にどこか似通った、オンライン日記でした。アンネ・フランクは、第2次世界大戦中の隠れ家での生活について書きました。「いつ友人に再会できるのか?」、「自分が外に出られないのはなぜなのか?」——アンネと同じ若者らしい思いを、イラク人のブログは彷彿とさせるものでした。

ブログを利用すれば、多様な人々に対する理解を深める後押しをすることができます。ブログを書いたり、他人のブログを読んだりすることで、その人の境遇を深く理解することができるのです。ブログは、異文化間の交流を育む方法として推奨されるべきです。誰かの日常生活のちょっとした言葉が、未解決の問題を解決する手立てになる可能性もあります。未知のものに対する恐怖や知識の欠如から、多くの紛争が起きています。ブログは、人々を知るためのアクセス・ポイントになります。今日は他人と呼んでいた人たちが、明日は友達になっているかもしれません。

また、イラク戦争では、衛星電話も登場しました。大規模な爆撃と戦闘により、イラクの通信インフラの大部分が破壊されました。そんな状況下では、テレビカメラと無線送信機、インターネットでは不十分でした。衛星電話のおかげで、ジャーナリストは最前線からの報道を行うことができました。

「食糧を与えれば、人々は、今日のところは飢え死にしないだろう。しかし、食糧を生産する道具を与えれば、この先ずっと飢え死にすることはない」。メディアに話を聞いてもらえない、目を向けてもらえないと感じる、才能ある若者が大勢います。この状況は、若者向けニュース・サービス、「ユース・ニュース」を創設することで変えられます。

これは、報道機関をまとめる組織という形を取り、ユネスコと五井平和財団が、若者が記事を発表できる場としてそれぞれのウェブサイト「ユース・ニュース」のセクションを設けます。また、ユネスコと五井平和財団は、「ユース・ニュース」向けの取材に若者を派遣し、短いビデオやラジオ・レポートを製作するチャンスを彼らに与えることも可能です。こうしたレポートの長さは、5分以内とします。

最後になりますが、技術は、よりよい世界を築くために重要な役割を果たすことができます。例えば、電子フォーラムを設ければ、人々が集い、さまざまな問題について安全に討論できる仲介の場が提供できます。カトリックとプロテスタント、黒人と白人、東と西。人々の分裂が世界各地に多く存在しています。そこで、管理された電子フォーラムで、討論のテーマを指定すればよいと思います。道で会っても挨拶しない間柄でも、そこでなら、人々は意見を投稿し、討論に参加することができるのです。